

嘘のような本当の話 Ⅱペダルを踏んでⅡ 奥山孝雄(東高九回卒)

一九五七年(昭和三十三年)私が本校二年生で蹴球部員としてひたむきにボールを蹴っていた時のことです。今からもう六十余年も前の話です。

チームメイトの板坂寛之君、遠藤金弥君、佐藤研一君と夏休みの行事として、蹴球部(昭和三十五年サッカー部に改名)の夏季合宿のあと自転車旅行をしようとして計画したのです。学校へは行く先…八郎潟、所要日程…一週間、目的…見聞を広めた体力増強のためと届け、蹴球部顧問海老名八郎先生から四名の名前、住所、容貌を自書した身分証明書を作成していただいたのです。

いよいよ七月三十一日(火)出発の日を迎え、山形市北の郊外に集合します。自転車は現在の軽快車と異なり頑丈で幅広のタイヤで重い車体です。持ち物は飯盒、毛布一枚、着替え、小座蒲団、現金少々です。それに米です。その当時活は食糧管理法という法律があつて自由に売買できず配給制だったのです。(部活動の宿泊を伴う遠征には、必ず米を持参したものです)各自の健康状態と忘れ物を確認し合い、五時にサドルに小座蒲団を乗せペダルを踏み出したのです。

その当時の道路事情は国道十三号線の袖先小学校までと、集落の一部分が舗装されているだけでほか砂利道でした。一日目の難所は猿羽根山越えです。現在はトンネル道になっていますが、当時は砂利道を峠越えしたものです。登り切っ

たあと峠の茶屋で飲んだ水は忘れることの出来ない一杯でした。心配した雨が古口あたりから大雨になり、十七時ころ余目小学校へ海老名先生の身分証明書を呈示して今夜の宿泊をお願いします。本校は行事があるためと少し離れた、やや祭り、で有名な千河原分校を幹旋されたのです。分校の先生と同じ蚊帳の中に泊めていただき世間話をしながら眠りに就いたのです。この当時、学校には宿直制度があり、先生が交替で学校に宿直することになっていたのです。翌朝、お礼を申し上げるとともに身分証明書に裏書をお願いしたのです。

二日目は雲が低く垂れ込めた余目を出発し、酒田の高校総体の応援に後ろ髪を引かれながら先を急いだのです。秋田県境を越えると心配した雨が降り出したのです。雨は次第に大降りになり金浦あたりから道を間違え、すっかり濡れねずみになったのです。本荘市に着き急ぎ学校を探し、東小学校へ宿泊をお願いしますが断られ、呆然としながらも次の本荘高校へお願いすると快く了解してくれました。

食事班、宿泊班、洗濯班に分かれ直ぐに行動を開始したのです。各学校には炊飯、洗濯、入浴など家庭生活用品が揃っている小使い室があり、それを利用させていただくのです。責任者は小使いさん、学校で個室を持っているのは校長先生と二人だけです。食事班は全員の飯盒にそれぞれ一合の米を炊き、宿泊班は今夜の泊まる部屋は柔道場なので畳を整え、洗濯班は濡れた衣類を洗い干すのです。

私の米は手拭を縦二つ折りに縫った袋に一合ごとに紐で留めてあり、母の生活の知恵を知ったのです。明日の行動を考え早い就床をしたのですが、蚊に悩まされ毛布を頭からかぶったのはよかったです。今度は暑さに閉口したのです。

翌朝、お礼を述べて身分証明書の裏書を忘れずをお願いします。日本晴れに心が弾み七時に出発し、途中路傍に自転車を止めて朝食をとったのです。夜に炊いた飯盒のご飯は夜に半分、翌朝に半分、昼はパンという摂食計画です。

好天気のお陰で正午には目的地とした八郎潟（現在は干拓により田園集落）に着いてしまったのです。見渡せば遠くまで水が漂っているだけ、見るものが何もないのです。鳩首会談の結果「十和田湖」まで足を伸ばそうということになったのです。当初は十和田湖を予定したのですが、五万分の一の地図で調べると雄勝峠を自転車で越えるのは困難と判断した経緯があり、学校へ届けた日数にも持参した米にも余裕があるというのが我々の勝手な理由です。

昼食のパンを求めに商店に入ったところ、店の小母ちゃんから「山形から自転車で来たの！アンちゃんだ偉いの〜朝ご飯の残りだけど食ってー」と親切にびっくりしながら豪華な昼食にありついたのです。行く先が遠くなったので拍車がかかり、この日の走行は約百キロメートルと力が入ったのです。

この日は能代南高へ一夜の宿をお願いしたのです。これまでは学校からいろいろと説明を求められましたが、裏書のある身分証明書を見ていただくといと

も快く泊めていただいたのです。その夜の宿泊場所は合宿所で合宿中の生徒さんからおにぎり等の差し入れがあり、また格別の夕食を味わったのです。

次の日は今にも雨が降り出しそうな空の下、無心でペダルをこいだのです。途中俄か雨に遭い悪路に困難しながらも、漸く大館に着いたものの霧雨が降っているため毛馬内行きを断念し、十五時には大館鳳鳴高へ宿泊をお願いしたのです。当直の先生と同じ蚊帳の中で学校の授業内容や、進学などの話をしながら眠りに就いたのです。

八月三日（土）いよいよ目的地の十和田湖です。目的地を変えたため五万分の一の地図による事前の調査をしております。自転車で登れるのか？登れるとすれば時間がどれくらい要するのか？期限まで帰れるのか？など相談の結果公共交通機関を利用することにしましたのです。学校を五時半に出発し、大館から汽車、毛馬内からバスで漸く十和田湖に着いたのです。霧雨に煙っていましたが、休屋に着くときれいに晴れ渡ったのです。湖畔の乙女の像を一瞥しながら半島へ登り、十和田湖を俯瞰するとその秀麗さに感激したのです。滞在時間僅か三時間足らずで別れを告げます。大館駅に取って返し自転車に跨り帰路を急いだのです。能代市の手前でパンクをします。出発前にパンク修理の実施訓練をしたのですが、疲れて修理する気になれず自転車店を探したのです。そんなことも遭って八時過ぎに東能代小学校へ宿泊をお願いしますが断られます。めげずに探して

十九時湊城第三小学校へ宿泊を許されたほか、二十一時半過ぎまでの銭湯への便宜を計らってもらったのです。

八月四日は日曜日ですが、早朝から帰路を急ぎ自転車を走らせたのです。しかし、学校へ届けた帰宅の日まで十分間に合う目算が出来たとたん速度が落ちたのです。十七時松ヶ崎中学校へ泊めていただき、当直の先生と同じ宿直室に泊まることになったのです。「今日は暑かったな〜風呂に入って汗流せ！」と先生が指差す校庭の片隅に石組みの上にドラム缶が鎮座しています。宿直室からフリチンでドラム缶風呂を興味深くいただいたのです。二の腕を缶の縁に乗せ日本海へ目をやると、真っ赤に燃えた大きな太陽が今まさに手の届きそうな海に沈もうとしているのです。この光景はいまだ新鮮な残像として脳裏に残っているのです。

八月五日、朝食を店の片隅を借りていただいておりますと、店主のグランドバンチャンが十和田湖の伝説を懇切に教えてくれるのです。夕方山形県境を越えて遊佐町入ると夕立が迎えてくれたのです。旅行最後の宿泊を余目中学校へお願いしますと宿泊室は衛生室です。疲れたせいもあってかベットから転げ落ちびっくりしたのです。

最終日、はやる気持ちで最後の難所猿羽根峠を越えて、山頂の茶屋へ正午前に着いたのです。昼食はお金の心配をせずに豪華にいただきます。茶屋のお姉ちゃ

んが綺麗に洗濯した手ぬぐいを我々の前に差し出したのです。往きに忘れたものを届けようと何時帰るか分からない我々を待っていてくれたと聞いて感激したのです。夕刻八日間の自転車旅行を終えて恙なく帰宅したのです。暑い日に重い自転車を乗り通せたのは、小座蒲団とシツカロール（小児用汗疹知らず）の陰だったようです。旅行に要した費用は約千五百円で多くが毛馬内・十和田湖間のバス代です。何よりも皆さんの親切な心に触れた経験は偉大なる学習です。

今、「学校へ泊めてください」なんて言ったら刺股で攻撃され、警察のお世話になることでしょう。好き時代でした。半世紀の間、経済性と利便性を追求した結果、日本民族の慈しみに満ちた心を失った代償は計り知れなく大きかったです。うです。

翌年の高校総体では庄内勢を総なめし、決勝戦で山形工業高と延長4回試合時間二時間三〇分の死闘を繰り広げ、両校痛み分けの優勝となり、本校は初優勝を遂げたのです。

当日、永田(市川)克彦主将の自宅で初めていただいた分厚い生ハムの美味さが、やる気へ結びついたのかなくとも思っています。